

令和4年度病害虫発生予報第2号

令和4年5月2日

山梨県病害虫防除所

今月の天気予報

4月28日気象庁発表、1か月予報による関東甲信地方の向こう1か月（予報期間4月30日～5月29日）の天気は次のとおりです。

暖かい空気が流れ込みやすいため、向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。1週目の気温は低く、2週目の気温は高く、気温の変動が大きい見込みです。

前線や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

I 特に注意が必要な病害虫

【果 樹】 ※予想される主な病害虫の発生時期及び発生量等は以下のとおりです。

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	べと病	やや早い	平年並～ やや多い	<ul style="list-style-type: none">○ 昨年の発生量は平年並からやや多く、園内の越冬病原菌は多いとみられる。○ 4月下旬現在、生育が進んでいる園もみられ、発生も早まるとみられる。○ 向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。□ 展葉5～6枚から防除を行う。この時期以降、曇雨天と低温が重なる気象状況では発生が多くなる恐れがある。□ ほ場の立地条件や、夜温などの気象条件、また、品種によって発病が多くなる事もあるので注意する。□ 発病した葉や花穂は伝染源になるため、見つけ次第除去する。発病初期にはオロンディスウルトラSCまたはジャストフィットフロアブルの追加防除を行う。□ 「Ⅲ 各種病害虫対策」の項も参考とする。
	晩腐病	やや早い	やや多い	<ul style="list-style-type: none">○ 昨年、発生量がやや多く、結果母枝等の越冬病原菌は多いとみられる。○ 4月下旬現在、生育が進んでいる園では開花期が早まるとみられ、病原菌の飛散も早まるとみられる。○ 向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。□ 病原菌は、雨水により飛散するため、落花期以降、降雨が続く場合は注意が必要である。□ 雨水による感染を防ぐため、ジベレリン処理後直ちにロウ引きのカサかけを行う。□ 防除暦に従い薬剤防除を徹底するとともに、ブドウ晩腐病防除マニュアル（令和3年12月発行）を参考に防除対策を行う。

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	黄化葉巻病	—	平年並 ～ やや多い	<p>○4月下旬現在、一部の巡回ほ場でわずかに発生が見られる。</p> <p>□媒介虫であるコナジラミ類の防除を徹底する。（コナジラミ類の欄参照）</p> <p>□発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて、コナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し土中に埋めるなど適切に処理する。</p> <p>□「Ⅲ 各病害虫対策」及び令和3年度病害虫防除所情報第4号「施設栽培トマトの黄化葉巻病対策について（半促成栽培）」（令和4年3月発行）も参考にする。</p> <p>https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/documents/220322.jyouhoudai4gou.pdf</p>
	コナジラミ類 タバココナジラミ オンシツコナジラミ	—	平年並	<p>○4月下旬現在、黄色粘着トラップほ場（中央市）においてコナジラミ類はハウス外でのみ誘殺が確認されている。</p> <p>○タバココナジラミが媒介する黄化葉巻病が、一部ほ場で発生している。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□今後、気温の上昇とともに増加する恐れがあるため注意する。</p> <p>□トマトのウイルス病を媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、施設開口部（天窓、側窓、換気扇口等）に0.4mm目以下の防虫ネットを設置する。</p> <p>□黄色粘着板を設置し、コナジラミ類の誘殺状況を定期的に確認し、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> <p>□施設内外の雑草は、コナジラミ類の増殖源となるため、除草を徹底する。また、芽かき、葉かきした茎葉は適切に処理する。</p> <p>□トマトのマルハナバチ導入施設では、薬剤の使用が制限され、発生が助長されるため注意する。</p> <p>□「Ⅲ 各種病害虫対策」の項も参考とする。</p>

Ⅱ 各作物の病害虫発生予報

【果 樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
モモ	せん孔細菌病	—	平年並	<p>○4月下旬現在、春型枝病斑（芽枯れ等）の発生量は前年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□芽枯れや枝枯れ、春型枝病斑のある枝は、順次発生するので見つけ次第除去する。</p> <p>□収穫前日数に注意し、防除歴に従いマイコシールド1,500倍を散布する。なお、天候不順（曇雨天）が続く場合は7～10日間隔で追加防除を行う。</p> <p>□モモせん孔細菌病防除マニュアル（令和3年12月発行）を参考に防除対策を徹底する。</p>

【果 樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
モモ	<u>黒星病</u>	平年並	平年並	<p>○ここ数年、幼果期の防除が徹底されており、発生量は平年並で推移している。</p> <p>○向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□5～6月に降雨が多いと発生が多くなるため、防除暦に従い防除を徹底する。</p>
	<u>モモハモグリガ</u>	—	平年並	<p>○4月下旬現在、フェロモントラップ（韮崎市、山梨市、笛吹市）への誘殺数は平年並であるが、一部地域ではやや多い。</p> <p>○向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□第1世代成虫のピークとなる5月中旬の防除を徹底する。</p> <p>□地域や園地によって発生程度に差があるので注意する。</p> <p>□発生が多い場合、モスピラン顆粒水溶剤を追加散布する。</p>
	<u>ナシマルカイカラムシ</u>	やや早い	平年並	<p>○休眠期防除などの徹底により、越冬量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□例年、5月下旬～6月上旬が1回目のふ化幼虫の発生時期にあたる。この時期、幼虫発生が揃うため防除効果が高い。</p> <p>□防除薬剤は、アプロードフロアブルを用いる。細枝に多く寄生するので、主枝等の先端部にもかかるように十分量散布する。</p>
	<u>スモモヒメシクイ</u>	平年並	平年並	<p>○昨年の発生量は平年並である。</p> <p>○4月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市）への越冬成虫の誘殺数は平年並である。</p> <p>□越冬世代成虫の飛来が増える5月中旬からの防除を徹底する。</p> <p>□被害の多い園や晩生種では交信かく乱剤（ナシヒメコン）を利用する。</p>

モモハモグリガのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/92111468716.html>

スモモヒメシクイのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/92111468716.html>

【果 樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	うどんこ病	平年並	平年並 ～ やや多い	<p>○近年、防除が徹底されており、発生量は平年並で推移している。</p> <p>○向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□5月中下旬から葉や花（果）穂に発病するので、開花直前や小豆大期の防除を徹底する。</p> <p>□葉や花（果）穂への発病が、突発的に見られるので注意する。特に湿度が高い日が続く場合は、多発するので注意する。</p> <p>□風通しの悪い園や河川の近くのはほ場でも発生が多いので注意する。</p> <p>□特に発病しやすい欧州系品種では、花（果）穂の発病状況に注意する。</p>
	クリコナ カイカラムシ	平年並	平年並	<p>○昨年、防除が不十分だったほ場、雨除け栽培、抑制栽培では発生がみられた。</p> <p>○向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□例年、5月上旬～中旬が1回目のふ化幼虫の発生時期にあたる。この時期、幼虫の発生が揃うため防除効果が高い。</p> <p>□被害の多い園では、防除暦等を参照にスタークル顆粒水和剤またはアルバリン顆粒水和剤の樹幹塗布による防除を併用する。</p>
カキ	落葉病類	—	平年並 ～ やや多い	<p>○昨年秋の巡回調査で発生園が多く見られ、園内の越冬病原菌は多いとみられる。</p> <p>○向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□落葉で越冬した病原菌が雨風により飛散して感染する。</p> <p>□感染期間が5～7月と長期間にわたるため、防除暦に従い落花後から定期的な予防散布を行う。</p>
果樹全般	果 樹 カメムシ類	—	平年並	<p>○4月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市、甲州市）への越冬成虫の誘殺数は平年並である。</p> <p>□山野部に、野生する餌（実）量によって、果樹園への飛来状況が異なる。</p> <p>□飛来状況は、地域やほ場によって差があるので、夕方～夜間（夜温が低いうちは昼間）に園を確認し、飛来状況に応じて地域ごとに一斉防除を行う。</p>

カメムシのフェロモントラップ調査結果

https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/ka_jyukame.html

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	葉かび病	—	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□抵抗性品種でも発病する菌が存在するため、注意して症状の有無をする。</p> <p>□多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p>
	すすかび病	—	並 (例年比)	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□葉かび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。</p> <p>□多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p>
	灰色かび病	平年並	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、低温に注意しながら換気を行い、施設内を適度な湿度に保つ。また、多湿時は循環扇を稼働させ、湿度の低下を図る。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉・花弁・果実は除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。</p>
半促成キュウリ	べと病	—	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。</p> <p>□多発すると防除が難しくなるため、発生初期の防除を徹底し、発病した葉は除去して施設外に持ち出し処分する。</p>
	うどんこ病	平年並	平年並 ～ やや多い	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉・果実は除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□多発すると防除が難しくなるため、予防防除に重点を置く。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成キュウリ	褐斑病	平年並	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が高湿多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。</p> <p>□予防散布を徹底し、発病した葉は早期に除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□カンタスドライフロアブル、ベルコートフロアブルは一部に耐性菌が確認され、今後の耐性発達が懸念されるため、連用を避ける。</p>
	アブラムシ類	—	並 (例年比)	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高い見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。</p>
	ハダニ類	—	並 (例年比)	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高い見込みである。</p> <p>□今後、気温の上昇とともに増加する恐れがあるため注意する。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p> <p>□葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。</p>
スイートコーン	オオタバコガ	平年並	平年並	<p>○4月下旬現在、フェロモントラップへの成虫誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□雄穂抽出期、絹糸抽出期に薬剤防除を行う。</p>
	アワノメイガ	平年並	平年並	<p>○4月下旬現在、フェロモントラップへの成虫誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□雄穂抽出期、絹糸抽出期に薬剤防除を行う。</p>
	ハダニ類	並 (例年比)	やや多い (例年比)	<p>○近年、ハダニ類の発生が多く見られている。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高い見込みである。</p> <p>□今後、気温の上昇とともに増加する恐れがあるため注意する。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。</p>

オオタバコガ、アワノメイガのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜全般】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
うどんこ病 (施設)	—	平年並 ～ やや多い	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉、花、果実は除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□多発すると防除が難しくなるため、予防防除に重点を置く。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p>
灰色かび病 (施設)	—	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように、過度な灌水は控え、低温に注意しながら換気を行い、施設内を適度な湿度に保つ。また多湿時は循環扇を稼働させ、湿度の低下を図る。</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉、花、果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□前年多発したほ場では発生に注意し、予防散布に努める。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p>
アブラムシ類	平年並	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。</p>
ハダニ類 (施設)	平年並	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高い見込みである。</p> <p>□今後、気温の上昇とともに増加する恐れがあるため注意する。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p>
オオタバコガ	平年並	平年並	<p>○4月下旬現在、フェロモントラップへの成虫誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□老齢幼虫には薬剤の効果が低いため、発生初期の防除に重点を置く。</p> <p>□果実での食害痕や虫ふんを目安に幼虫を見つけ、捕殺する。</p> <p>□夏秋ナスでは、5月中旬から若齢幼虫が見られ始めるので、初期防除を徹底する。</p>
アザミウマ類 (施設)	—	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高い見込みである。</p> <p>□今後、気温の上昇とともに増加する恐れがあるため注意する。</p> <p>□発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□侵入防止のため施設開口部に防虫ネットを設置する。</p> <p>□施設周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。</p> <p>□トマトのマルハナバチ導入施設では、薬剤の使用が制限され、発生が助長されるため注意を要する。</p>

オオタバコガのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【稲】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
いもち病（苗）	平年並	平年並	○向こう1カ月の降水量は平年並か多い見込みである。 □早期発見、早期防除に努める。 □育苗日数が長引かないように注意する。 □発病苗は見つけ次第、処分する。
<u>イネミズゾウムシ</u>	平年並	平年並	○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 ○昨年の発生量は平年並であった。 □6月上旬までに田植えをする場合は、育苗箱施用剤を必ず処理する。 □育苗箱施用剤を処理しなかった場合、成虫が2株当たり1頭以上認められたら、粒剤の散布を行う。

【樹木類】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
<u>アメリカシロヒトリ</u>	平年並	平年並 ～ やや多い	○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 ○4月下旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は甲斐市では平年並であるが、笛吹市でやや多い。 □5月下旬から6月上旬が1回目の若齢幼虫の発生時期と予想され、この時期の防除が最も重要であるので、丁寧に薬剤散布する。 □発見が遅れると被害が増加し、薬剤効果も低下するため、早期発見、早期防除に努める。 □幼虫が分散する前に巣網を取り除く。 □公園、街路樹等における防除にあたっては捕殺を優先し、やむをえず薬剤散布を行う場合は飛散防止対策を徹底する。

アメリカシロヒトリのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/ameshiro.html>

防除薬剤は県病害虫防除基準・農薬適正使用指針による。
ただし、他作物が隣接して栽培されている場合は、農業協同組合が作成した代替薬剤の防除暦等を参考に、薬剤の選択を行う。

III 各病害虫対策

【ブドウべと病の防除対策】

- (1) 新梢管理（芽かき、誘引、摘心等）により、棚面の明るさや風通しを確保し、葉・花穂に薬剤が充分付着するように努める。
- (2) 展葉後、曇雨天が続く年は開花前から葉や花穂で発病し、その後多発する傾向があるため、管理作業と合わせ発病の有無を確認する。また発病した葉や花穂は、伝染源となるため、見つけ次第取り除き、ほ場から持ち出し処分する。
- (3) 散布開始時期は展葉5～6枚から行い、散布間隔を10日以内とし予防散布に努める。
- (4) 薬剤散布量を遵守する。

- (5) 散布予定日に降雨が予想される場合は、散布を延期せず、降雨日前に散布する。
- (6) 散布後に降雨が続いたり、集中豪雨があった場合は、防除効果や残効期間が短くなるため、散布間隔を短くする。
- (7) ベと病防除剤の注意事項
 - ・天候不順が予想される場合や発病初期には、オロンディスウルトラ SC2,000 倍またはジャストフィットフロアブル 5,000 倍をかけむらのないよう丁寧に散布する。周辺に立木類がある場合は飛散しないよう注意する。耐性菌の発生を防ぐため、連用を避け、年 1 回の使用とする。
 - ・ベと病防除剤は立木類に作物登録がないものが多いため、農薬ラベルをよく確認するとともに、隣接園に飛散しないよう充分注意する。
 - ・オーソサイド水和剤 80（使用回数は計 3 回まで）は、キウイフルーツの隣接園では飛散しないよう充分注意する。また、スモモに葉害が発生する恐れがあるため、隣接園では飛散に注意する。

【ブドウ灰色かび病の防除対策】

- (1) 開花～落花期が天候不順にあたると、花かすが残りやすく発病しやすくなるため、防除を徹底する。
- (2) 開花前から防除暦に従い予防散布に努め、開花後には花かす落としも徹底する。品種によっては花冠が残ったままではサビ果発生要因となるので注意する。
- (3) 発病した花穂や果粒は、見つけ次第取り除く。

【ブドウ黒とう病の防除対策】

- (1) 本病の感染時期は早く、早春から菌が動き出し、雨水に混じって伝染するため、生育初期からの防除を徹底する。
- (2) 病斑は、約 2 年間、菌を放出するため、病斑が見られる結果母枝等は見つけ次第除去する。
- (3) 特にシャインマスカット等は本病に弱いので、耕種的防除と併せ、防除暦に従い定期的な予防散布に努める。

【ブドウのミカンキイロアザミウマの防除対策】

- (1) 開花期に加害するため、防除暦に従い本虫に効果のある薬剤で防除を行う。
- (2) 開花前に園内の草刈りや除草を徹底する。

【施設ブドウのハダニ類対策】

- (1) 例年、気温が高くなる時期以降から発生がみられる。発生はスポット的に始まるので、発生初期を見逃さず防除を徹底する。
- (2) 防除暦を参考に、殺ダニ剤の散布を行う。発生が拡大してからの防除では発生を抑える事は難しく、多発すると果実品質にも影響が出るので注意する。

【立木類（モモ、スモモ）のアブラムシ類対策】

- (1) 発生初期の防除を徹底する。
- (2) 発生が続く場合は、アドマイヤー水和剤 2,000 倍またはウララ D F 2,000 倍を追加散布する。

【オウトウのオウトウショウジョウバエ防除対策】

- (1) 中・晩生種で被害が増加するため、果実の適期収穫に努める。特に加温ハウスや取り残した果実が多い園の隣接園では、発生が早いので注意する。
- (2) 発生状況に注意し、初期からの予防防除を徹底するとともに、収穫が長引く場合は追加防除を行う。
- (3) 被害果は土中に埋める等、適切に処分する。

【トマトのウイルス病（トマト黄化葉巻病、トマト黄化病）を媒介する コナジラミ類の防除対策について】

- (1) コナジラミ類の侵入を防ぐため、施設開口部（天窓、側窓、換気扇口等）に0.4mm目以下の防虫ネットを設置する。特に、出入り口のカーテンは二重にして侵入を防止するとともにネットの隙間がないか、経年劣化等による穴の有無など施設の点検を励行する。
- (2) 施設内に黄色粘着板を設置し、コナジラミ類の発生状況を確認することで、適期防除に努める。
- (3) 薬剤効果の低下が認められるタバココナジラミ（バイオタイプQ）が広く存在するため、薬剤選択に注意する。なお、同一系統薬剤の連用は、薬剤効果の低下につながるため、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を実施する。
- (4) 施設内外の雑草は、コナジラミ類の増殖源となるため、除草を徹底する。また、トマト以外の植物を施設内で栽培しない。
- (5) 発病株は見つけ次第抜き取り、透明のビニール袋に入れ、日光に当てて高温にして虫を死滅させてから、施設外に持ち出し土中に埋める。
- (6) 芽かき、葉かきした茎葉は、コナジラミ類の増殖源となるため、ビニール袋に入れて枯死させてから持ち出す。

【夏作物作付前の対策】

夏秋ナス青枯病、夏秋ナス半身萎ちょう病、夏秋トマト青枯病、夏秋トマト半身萎ちょう病、夏秋キュウリつる割病、土壌線虫等

- (1) 苗は抵抗性台木を用いる。また、ほ場は過湿を避けるため高畝にして排水対策を心がけるとともに、連作をさける。
- (2) 土壌中に残存している病原菌や害虫を死滅させるため、本畑の土壌消毒を行う。

【サツマイモ基腐病の対策】

近年、九州地域のサツマイモ産地において発生が確認され、被害地域の拡大が見られている。発病すると地際部から茎が枯れ、いもが腐敗する症状を引き起こすことにより、大幅な減収を生じる。本県での発生は確認されていないが、被害の蔓延を防ぐため、以下の点に注意する。

- (1) 未発生ほ場で生産されたことの確認などにより、健全な種苗を確保する。
- (2) 植え付け前の種苗消毒を行う。
- (3) 栽培期間中は、ほ場観察を通じて本病の早期発見に努め、発病株はほ場外に持ち出して適切に処分する。

本病の防除に関する詳細な技術対策については、農研機構のHPに掲載されている、以下のマニュアルを参照とする。

「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和3年度版）」

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator03.pdf

【稲】

種子伝染性病害対策

種子伝染性病害では、主にいもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病などがある。以下の点に注意し、は種前の防除を徹底する。

- (1) 発病ほ場の籾は、種子として使用しない。
- (2) 塩水選を行い、り病籾を選別し、取り除く。
- (3) 薬剤による種籾の消毒は同時防除を徹底する。

いもち病、もみ枯細菌病、ばか苗病の同時防除を行う場合は、次のいずれかの方法で行う。

- ①乾燥籾を薬剤（スポルタックスターナSE200倍又はテクリードCフロアブル200倍）に24時間浸漬する。
- ②乾燥籾を薬剤（上記薬剤の各20倍液）に10分間浸漬する。

なお防除効果を高めるため、薬液の温度は15℃以下にならないようにする。

苗立枯病対策

苗立枯病は、主にリゾープス菌やピシウム菌、フザリウム菌、トリコデルマ菌などの糸状菌によって引き起こされる。以下の点に注意し、育苗期の防除を徹底する。

- (1) 育苗ハウス、床土及び育苗箱の消毒を徹底する。
- (2) 緑化期以降は昼間 25℃以上、夜間 10℃以下にならないよう、保温資材の開閉はこまめに行う。
- (3) リゾープス菌による立枯病を防ぐため、べた積みは避ける。高温や多湿、過灌水は発病を助長するため注意する。

IV その他

【水田において使用する農薬の止水期間の遵守について】

- (1) 農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項を確認し、止水期間を7日間とする。また、止水期間の農薬の流出を防止するために必要な水管理や畦畔整備に努める。
- (2) 特に、水稻の移植前に使用することができる農薬については、農薬のラベルにおいて使用時期が「植代時から移植4日前まで」とされているものであっても、農薬の河川等への流出を防止するため、使用時期は植代時から移植7日前までとし、移植6日前以降には使用しないこと。

【農薬は正しく使いましょう】

(農薬の適正使用について：

https://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gjt/kenkyu/nouyaku_shiyou.html 参照

連 絡 先

山梨県病虫害防除所（山梨県総合農業技術センター調査部）

TEL 0551-28-2941

Eメール byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

インターネット

山梨県病虫害防除所ホームページ

予報対象作物を中心に「トラップ調査結果」「病虫害写真」等を掲載しています。

アドレス <https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>